

の 研究 の

平和という困難

——古代キリスト教の平和主義・再訪——

安 念 潤 司*

- I はじめに
- II 旧約聖書の世界
- III 古代キリスト教
- IV 寓意的聖書解釈
- V 現代からの回顧

I はじめに

私は、2017年3月16日、一般社団法人「機動隊員等を励ます会」¹⁾の朝食講演会において、「憲法9条とは、結局、何であったのか」と題して講演する機会を与えられた。羽矢惇氏（同会理事長）、高谷俊秀氏（同会常任理事）、同会の会員各位の御高配の賜物である。また、縁あって私を同会に紹介して下さった佐久間総一郎氏（新日鉄住金株式会社代表取締役副社長）にも御礼申し上げます。なお、当日の名簿によれば、出席者は、もっぱら新日鉄住金およびその関連企業各社の経営幹部であった。

浅学な私のことゆえ、講演の内容とはいっても、政府の憲法解釈の変遷や、世論の動

* 中央大学法科大学院教授，弁護士

向を一渡り概観する程度のものであったが、ただそこで、淵田美津雄²⁾という旧海軍軍人の履歴を紹介したことが、出席者の多少の関心を引くよすがとなったかも知れない。

淵田は、現地時間 1941 年 12 月 7 日朝のハワイ・真珠湾攻撃の飛行隊総隊長³⁾として奇襲を見事に成功させた、太平洋戦争を語る上で逸し難い人物の一人である。一度ならず映画化もされたから、鼻下にチョビ髭を蓄えた飛行士官を覚えている向きも少なくあるまい。もっとも、戦略的な意義のある大成功はこれだけで、現場指揮官であった淵田の責任ではないが、それから先は、これといった華々しい戦果には恵まれなかった。1942 年 6 月 5 日のミッドウェー海戦では、運悪く虫垂炎手術の直後で、空母「赤城」の飛行甲板の片隅で観戦しているしかなかったことは、よく知られた戦史の一齣である。足に重傷を負いながらも辛くも生還して内地で療養した後は、幕僚勤務が続き、第一航空艦隊参謀などを経て、敗戦時には、聯合艦隊（および海軍総隊）航空参謀であり、1945 年 9 月 2 日に行われた戦艦ミズーリ号上の降伏文書調印式にも随行した⁴⁾。最終の階級は、海軍大佐^{だいさ}であった。

ここまででも十分非凡な履歴であるが、講演の主題との関係で一層興味深いのは、淵田が戦後、キリスト教に出会い、アメリカを中心としてキリスト教の伝道に余生を捧げたことである。今とは比べ物にならないくらい海外渡航の困難であった時代に、前後 9 回渡米し、倦むことなく異国の地で、キリストの福音と戦争の過ち・平和の尊さを説き続けた。福沢諭吉は、幕末・明治の二つの時代を生き得た幸運を「一身にして二生を経る」と表現したが、淵田の人生もそれとよく似ている。

淵田の人生は、前半の軍国主義から後半の平和主義へ、もの見事に変身を遂げた昭和史そのものと不思議なほど「同期」しているが、私が関心をもち、また講演でも触れたのは、時代の大変化の拠って来る所以などという大問題ではない。それよりも知りたかったのは、淵田にあってキリスト教と平和（裏返していえば戦争）とがどのような関係に立っていたのか、である。淵田自身は思想家ではなく、情熱と行動の人であったから、自分の考えを体系的に語ったわけではないが、いわゆる絶対的平和主義者ではなかった。説教の出だいで、自分が真珠湾攻撃の指揮官であった経歴を披歴して聴衆の関心を引く手口をよく使っていたらしい。幾分おっちょこちょいの気味のあった淵田からすれば、一種のサービス精神の発露でもあったであろうが、やはり、自分の軍人としてのキャリアには誇りを持ち続けていたと思われる。アメリカにおいて、ドゥーリトル、マッカーサー、ミニッツ、スプルーアンスなど、淵田自身を含む日本軍を散々に苦しめた、太平洋戦争を代表する将星たちと歓談し、それを自伝の中で特筆している⁵⁾し、

晩年は、旧海軍士官の親睦組織である大阪水交会の会長も務めた。軍備をもつこと自体に反対したわけではないし、戦争は人間の業だと考えてもいたらしい。同時に、キリストの愛を説き、諸国民間の融和と平和を心から願っていたことも疑えない。多彩といえば多彩、矛盾といえば矛盾であり、さまざまな要素を、多彩なまま矛盾したままに抱え込んでいた人生であった。

古代キリスト教には、信仰との矛盾に悩んでついに敢然と軍務を捨てた聖人や殉教者の一連の物語が伝えられている。例えばトゥールの聖マルティヌス（315頃－397頃）は、伝記作者によれば、長く軍歴を経た後のある日、皇帝（背教者）ユリアヌス（331－363、在位361－363）に向かって、「これまでは兵士として陛下にお仕えしてきましたが、これからはキリストの兵士になります。戦うことは許されません。」と宣言した。皇帝は大いに怒って、「汝がかくいうのは臆病風に吹かれてのことだろう」と罵ったので、マルティヌスは、「では、明日の戦では、身に寸鉄を帯びずに戦陣に臨みます」と答えたところ、果たせるかな翌日、敵から和を請う軍使がやってきて、流血の惨を見ることなく勝利を得ることができたという。ここでは、勇気という兵士の美德は賞賛されているものの、職業軍人としての閱歴が、後半生の信仰生活のための準備として役立ったとされているのではない。彼は、軍役が心底嫌になったからこそ、敢えてそれを放棄したのである⁶⁾。

他方、私生活にも難があったらしい淵田⁷⁾について、よもや聖人伝が書けるはずもなく、また彼自身、書いてもらいたいと思わなかったであろう。私も、長年の淵田ファンの一人として、歴史上の人物の私行をとやかくあげつらうつもりは毛頭ない。それにしても、軍人が、あるいは軍人たる過去をそのままに抱擁した旧軍人が、いかにしてイエスの1900年後の弟子の一人として、平和を説き得るものなのか、興味とともに幾分か違和感が残る。

もっとも、こうした違和感は、日本人の、とりわけ日本のキリスト信徒⁸⁾ならではの感覚なのかも知れない。平和主義あるいは平和志向は、戦後の日本キリスト教に著しい傾向であったからである。カトリック教会は今日なお伝統的な正戦論を放棄していない。1965年に、教皇パウルス6世の下、第二バチカン公会議で採択された「現代世界憲章」は、これをもってカトリック教会が現代の人々との対話に入ったといわれる画期的な文書であり、「平和の推進と諸民族の共同体の促進」（第5章）を高らかに謳っているが、戦争の全面禁止には踏み切れなかった。その第79項は、次のように述べている⁹⁾。

……戦争の危険が存在し、しかも十分な力と権限をもつ国際的権力が存在しない間は、平和的解決のあらゆる手段を講じたうえであれば、政府に対して正当防衛権を拒否することはできないであろう。

(中 略)

祖国への奉仕に専念して戦線に従事している者は、自分が諸国民の安全と自由のための奉仕者であると考えべきである。この任務に正しく従事している間、彼らは真に平和の確立に寄与している。

ところが、日本のカトリック教会は、バチカンの公式見解に正面から異を唱えているわけではないが、石川明人が指摘しているように、平和にかかわるさまざまな文書の中で正戦の概念に「まったくといっていいほど触れていない」¹⁰⁾。そして、日本の軍事力の増強、軍事行動の拡大を志向する政策に対しては、つねに強く反対してきた。「一連の文書は、憲法9条の意義を評価し、とにかくそれを守るべきだという姿勢を基本とし、戦争や軍事に関するものとはとにかく全面的に否定するという、素朴な姿勢で貫かれている」¹¹⁾。

この点は、プロテスタント諸派も同様で¹²⁾、例えば、日本基督教団は、いわゆる安保法制の制定に際して、「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」というマタイ福音書5章9節の有名な聖句を冒頭に掲げる声明を発表し、その中で、安保法制が「立憲主義に反するものであることを深く憂い、抗議すると共に、政府に対して、同法を廃し、憲法の理念に基づく政治に立ち戻ることを強く求め」た¹³⁾。

キリスト教すなわち平和主義というイメージを確立する上で与って力があつたのは、誰にも勝って矢内原忠雄であつたろう。内村鑑三の衣鉢を継ぐ無教会派の指導者の一人として、終生揺るがぬ信仰を守り、いわゆる矢内原事件という筆禍事件に際しても節を持して東大教授の職を辞し、戦中であつてさえなお反戦の姿勢を貫き、戦後は、東大教養学部長、総長を歴任したその経歴は、戦後日本思想界のスーパースターたらしめるに十分であつた。最近に矢内原の小伝を公にした赤江達也が指摘するごとく、実に、「戦後の日本において、矢内原ほどの尊敬と称賛を集めてきた人物はあまりいない」¹⁴⁾。戦前・戦中にはキリスト教的「義戦論」¹⁵⁾(正戦論)を肯定していた矢内原が、戦後には、「敗戦による日本の非武装化、天皇による「平和国家」宣言、平和憲法の制定といった劇的な変化が相次ぐなかで、……「絶対的平和論」を唱え、あらゆる武装と暴力を否定するように」なり、その結果、彼は絶対的平和論の平和主義に棹さしつつ、「それを先導す

るような位置を占める」ことになったのである¹⁶⁾。

他方、キリスト教国、すなわちキリスト教が体制宗教である国に目を転ずれば、いうまでもないことながら、そこでは、信仰と戦争・軍隊とが（奇妙な形容になるが）平和的に共存している。無数の信徒の中には、政治家や軍人も数多く含まれているのであり、これらの人々を教会の外へ放逐することなど、到底できる相談ではない。絶対的平和主義の立場を維持したのは、キリスト教の諸流の中でもわずかに、再洗礼派、クエーカー、現代では、安息日再臨派、アーミッシュなどの少数派セクトにすぎなかった。彼らはまた総じて、政治にコミットすることに否定的・消極的であるが、それは、体制となることに関心のない者のみが、彼らの信仰の真摯さにはいかなる疑念も差し挟む余地がないことを認めた上で敢えていえば、安んじて絶対平和の教えを説き得たことを示唆している。現代アメリカの代表的な組織神学者リンドベックの次の言葉¹⁷⁾が、キリスト教2000年の歴史における戦争の位置づけを要約するものといえよう。

……キリスト教の歴史の大部分にわたる状況下では、一般に、平和主義は「拘束力のあるもの」とは見なされてこなかった。ほとんどの教会の見解では、平和主義は、たとえ「条件付きで必要」だとしても、「愛」というキリスト教の規則の「絶対的に必要な」結論ではないのである。

淵田が宣教に従事したのは、こうした、戦争を内に抱え込んだ上でのキリスト教であった。とりわけアメリカではこの抱合関係が顕著である。第二次大戦後西欧諸国の多くで急速に世俗化が進行し、日曜日ごとの礼拝・ミサの出席者も著減したのに対して、アメリカだけは例外的に深く宗教的であることを止めなかった。国民の多くが神の実在を信じ、政治家は、信仰心の深さを有権者に向かってアピールする。軍隊にあっても宗教は不可欠の要素であり、充実した「従軍チャプレン」制度を備え、よく知られているように、世界最初の原子爆弾を搭載したB29（エノラ・ゲイ）の出撃に当たっては、従軍牧師ウィリアム・ダウニー大尉によって、搭乗員が無事任務を遂行して帰還できるよう祈りがなされた¹⁸⁾。別に、綿密な市場調査をしたわけではなく、偶然の出会いの然らしむるところではあったが、アメリカは結果的に、根が軍人の淵田にとって、キリスト教の愛と平和の精神を説くのに最適の地であった。

してみれば、戦後日本のキリスト教が特異だったのであろうか。戦前の日本キリスト教会が必ずしも平和主義的ではなかった¹⁹⁾ことを想起すれば、平和志向は、キリスト教ではなく、戦後日本に特有の気質なのかも知れない。しかし、戦後日本キリスト教も、

キリスト教には違いないのであるから、そのある側面を拡大投射した姿なのではないか、とも考えられよう。本稿は、この「ある側面」の起源を探って古代キリスト教に遡行しようとするささやかな試みである。ここで古代とは、キリスト教が発生（それ自体、いつと見るべきか議論があろうが）してから、4世紀初頭にコンスタンティヌス1世（272頃 - 337, 在位 306 - 337）によって公認され、国家権力内部、とりわけ彼の最大の権力基盤であった軍隊において特権的な地位を与えられるまでの約300年間を指すこととする。

古代を選んだのは、私自身の能力面での制約によることはもちろんであるが、権力の特別の庇護を受けることなく、ギリシア哲学、ストア派、ユダヤ教、グノーシス派、（キリスト教から見ての）異教信仰などが、相互の境界も曖昧なままに並立・競合している環境でこそ、「差別化」戦略のためにキリスト教の特色が鮮明に現れているのではないかと考えたからである。なにしろ、最初の聖書学者とも呼ばれるギリシア教父、アレクサンドリアの人オリゲネス（185頃 - 254頃）の伝えるところでは、「神は物体である」と主張する論者がいた²⁰⁾という時代であった。ストア派末流の言い草かも知れないが、キリスト教が体制宗教化した後では考えられないような「何でもあり」の状況であったことが窺われるのであり、だからこそ、キリスト教徒としては、自らが何者なのであるのかを明瞭に語って自他の識別を図る必要があったであろう。

もちろん、本稿の内容のどの一部分をとってみても、私に専門知の持合せはない。オリゲネスに仔細らしく言及したものの、古典語を解しない身で、彼のギリシア語原典も、ルフィヌス（345頃 - 410頃）によるラテン訳も、直接読めようはずはなく、篤学の手になる邦訳と若干の英訳とを参看したにすぎない。4年に一度の「オリゲネス国際学会」(Origeriana)は、直近では、2017年にイェルサレムのヘブライ大学で開催されたが、そのプログラム²¹⁾を見ただけで、オリゲネス一人の研究でさえ、優に一生涯を費やさなければならない大仕事であることが分かる。それにもかかわらず、無学を承知の上で不遜な企てをなしたのは、専門知の世界はあまりにも細分化が進んで、一人の旧海軍軍人の人生の背景に古代キリスト教のありようを覗き見たい、などという素人の横着な思い付きに答えてくれそうにないので、自分で調べてみるしかなくなったという、ただそれだけの理由に基づくのである。

II 旧約聖書の世界

キリスト教は、イエス自身の言行録である四つの福音書を中心とする新約聖書ばかり

りでなく、旧約聖書をも聖典とするが、歴史的な順序をいえば、イエスの死の直後の教団は、ユダヤ教の一セクトにすぎなかった以上当然のことながら、まずは旧約を聖典²²⁾とした。その後、パウロ書簡をはじめとする書簡類が流布し、さらに紀元後1世紀の70年代以降、福音書が次々と書かれて次第に信徒たちの共有財産となっていく中で、長い時間をかけて新約聖書の内容・諸文書の配列が確定されていったのである²³⁾。古代キリスト教文学史の大家、エドガー・グッドスピードによれば、イエスの死後15年間は、教えが文書化された痕跡がないが、それは、キリスト再臨が間近だと思われていたことのほかに、イエスの教えは口承で伝えられるべきものと考えられていたこと、旧約が正しく理解されれば当然にキリスト教に行き着くと考えられていたこと、による²⁴⁾。キリスト教はその振出しの数世代にあって、福音書なしに自己形成を遂げたのである。マックス・ヴェーバーが指摘したように、キリスト教は、旧約なしにはセクトや密儀宗団のごときもので終わっていたであろう²⁵⁾。

その際、キリスト教側が旧約を解釈する方法として常用したのが、予型論あるいは予表論 (typology) であった。これによれば、旧約での出来事や預言は、神の救済計画における (旧約時代の人間から見ての) 未来のありようを何らかの意味で予兆するものであり、それが、イエスにおいて、新約聖書において、あるいは新約の時代において、具体化され完成されるのである。その最もよく知られた例は、イザヤ書7章14節の「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み/その名をインマヌエルと呼ぶ」という章句が、イエスの降誕の予型と解釈されたことであろう。新興勢力たるキリスト教は、こうした論理によって、片や旧約のみを聖典とするユダヤ教に、片や旧約の価値を認めないマニ教 (およびその背後に見え隠れするグノーシス派) に対抗したのである²⁶⁾。

しかし、教団形成に決定的な貢献をした旧約聖書は、また同時に古代教会に、大いなる重荷を背負わせることとなった。言い古されたことではあるが、旧約聖書で描かれる神が、時に「戦士としての神」などとも称されるように、その記述には、残忍で好戦的としか形容しようのない箇所が少なくない²⁷⁾ からである。例えば、申命記20章の次の記述は、その典型例といえよう。

10: ある町を攻撃しようとして、そこに近づくならば、まず、降伏を勧告しなさい。11: もしその町がそれを受諾し、城門を開くならば、その全住民を強制労働に服させ、あなたに仕えさせねばならない。12: しかし、もしも降伏せず、抗戦するならば、町を包囲しなさい。13: あなたの神、主はその町をあなたの手に渡されるから、あなたは男子をことごとく剣にかけて撃たねばならない。14: ただし、女、子供、家畜、および町にあるものはすべてあなたの分捕

り品として奪い取ることができる。あなたは、あなたの神、主が与えられた敵の分捕り品を自由に用いることができる。15：このようになしうるのは、遠く離れた町々に対してであって、次に挙げる国々に属する町々に対してではない。16：あなたの神、主が嗣業として与えられる諸国の民に属する町々で息のある者は、一人も生かしておいてはならない。17：ヘト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人は、あなたの神、主が命じられたように必ず滅ぼし尽くさねばならない。

攻撃前に降伏勧告はなされるものの、開門せず抵抗する都市に対しては、攻撃を加え成年男子は皆殺しにし、女・子供・家畜・財産はすべて分捕り品として使用することができるし、「主が嗣業として与えられる諸国の民に属する町々」には絶滅戦争が仕掛けられるのである。

上の箇所は、モーセからイスラエルの民に伝えられた一般的な律法の一部であり、したがって戦争の理論編とも呼ぶべきものであるが、実践編にも、流血淋漓たる様子がこれでもかこれでもかというほどに描かれている²⁸⁾。神の命令で、ヨルダン川を渡って次々と侵略戦争を敢行する預言者ヨシュア（モーセの後継者）の姿は、その著明な一例である。彼の命令一下、イスラエル人は、エリコの町の「男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くし」、助命されたのは、あらかじめイスラエル側に寝返っていた遊女ラハブとその一族だけであった²⁹⁾。同様に、「全軍隊を引き連れてアイに攻め上りなさい」という神の命令に従って出陣したヨシュアの「赫々たる戦果」は、ヨシュア記8章に誇らしげに書かれている。

24：イスラエルは、追って来たアイの全住民を野原や荒れ野で殺し、一人残らず剣にかけて倒した。全イスラエルはアイにとって返し、その町を剣にかけて撃った。25：その日の敵の死者は男女合わせて1万2千人、アイの全住民であった。26：ヨシュアはアイの住民をことごとく滅ぼし尽くすまで投げ槍を差し伸べた手を引っ込めなかった。

またヨシュアは、生捕りにした「アイの王を木にかけて夕方までさらし、太陽の沈むころ、命じてその死体を木から下ろさせ、町の門の入口に投げ捨て」させたのであった³⁰⁾。このほか、創世記が開卷早々、人類最初の殺人者カインを登場させている³¹⁾ことに象徴されるように、戦争・殺人の記述はほとんど枚挙に遑ない。特に、イスラエル人に仇なす敵を神意によって絶滅させる、いわゆる「聖絶」³²⁾の描写は、凄惨の一語に尽きる。先に見たモーセやヨシュアなどの預言者の時代に続く王国時代においてもそ

れは変わらず、イスラエルの最初の王サウル（紀元前10世紀）に預言者サムエルは、次のように語った³³⁾。

万軍の主はこう言われる。イスラエルがエジプトから上って来る道でアマレクが仕掛けて妨害した行為を、わたしは罰することにした。行け。アマレクを討ち、アマレクに属するものは一切、滅ぼし尽くせ。男も女も、子供も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも打ち殺せ。容赦してはならない。

もっとも、旧約聖書はこうした殺戮と聖絶の記述のみで満たされた文書だと見るのは、公平ではない。古代イスラエルにおいても戦争に関する多くの見解が闘ぎ合い、それが、旧約聖書において、聖戦論、正戦論、平和主義という大きな潮流に反映されている、という指摘もなされる。例えば、イスラエルの士師エフタが、アンモン人との領土紛争に際して、両当事国 of のいずれに相対的により多くの正義があるのか神に判定してもらおうとしたのは、正戦の観念の現れである³⁴⁾。イザヤ書、エレミヤ書が後世の平和思想の源流をなしたことは、改めていうまでもない。

また、ソロモン王のわずかな栄華の時代を除けばほとんどつねに「負け組」であった古代イスラエル人が、智略を逞しくして戦捷を重ねるヨシュアのような諸葛孔明ばりの軍師を持ち得たのかは、甚だ疑問であり、旧約戦記の張り扇は、民族を鼓舞する伝説か、さもなければ、魯迅の『阿Q正伝』の主人公が得意技とする「精神的勝利法」の一種であった可能性があり、その史実性は学問的に検証されなければならない³⁵⁾。

さらに、仮に史実を語るものであったとしても、これらの戦争は、古代キリスト教の信徒にとってもはるかに時代を隔たった出来事であったから、それが当代を生きる人々にとっていかなる意味をもつのかは、解釈の余地のある問題であった。もちろん、四角四面の読み方をする人は、いつの世にも珍しくない。再びオリゲネスの伝えるところによれば、「各々自分の家の中に座して、安息日の間、誰ひとりとしてその場から動いてはならない」という（彼が読んだ旧約聖書の）出エジプト記16章29節を文字通りに解して、安息日の始まったときとっていた姿勢、場所、位置のまま夕方まで留まっていなければならない、もし座していたら一日中座して、横になっていたら一日中横になっていなければならない、と説く者があったという³⁶⁾。「死海文書」を見ると、クムラン教団の信徒たちは、旧約戦記に忠実に、悪との天下分け目の聖戦に赴く覚悟を固めていたようである³⁷⁾。

しかし、旧約の戦争は、神の直々の命令あるいは文字通りの直率によるものである以

上、キリスト教徒から見た正当性に疑問の余地はないものの、当代には再現不能な現象であったから³⁸⁾、眼前の戦争の是非について論ずる際の直接の典拠になったわけではない。それゆえにアウグスティヌス(354-430)は、永久不変の神の摂理も、人間がそれを垣間見るときには時運(*ordo temporum*)に応じ異なる姿をとるのであって、旧約の純朴蒙邁の民には、戦争の帰趨も偏に神意によって決まることを教えたが、時満ちて新約の時代になると、来世のために、殉教者の如く現世の艱難を耐え忍ばなければならぬことを示した、と説き得たのである³⁹⁾。

とはいえ、旧約における族長や預言者たちの好戦的な振る舞いと、新約時代の殉教者たちの自己放棄的な行動の間には、あまりに深い溝があって、両者を統一的な視点で説明するのは困難に見える。近代日本におけるプロテスタント教界の指導者、海老名弾正が喝破したように、旧約聖書は、それを素直に読む限りは、「何人と雖も之が明かに戦争を是認するものなるを認めざるを得ざるべし」⁴⁰⁾というほかならう。

それゆえ、血に飢えた者たちにとって旧約聖書は、邪悪なファンタジーの恰好の源泉になった。すでに、2世紀末には、旧約の事績を引いてキリスト信徒の軍役従事を正当化するレトリックがあったらしく、ラテン教父の魁たるカルタゴ人にして根っから軍役の嫌いなテルトゥリアヌス(160頃-230頃)が、これに手を焼いている様が窺われる⁴¹⁾。こうしたレトリックの一つの頂点が十字軍であったことは、容易に想像がつく。十字軍参加者の愛好した聖句は、エレミヤ書48章10節の「主の剣をとどめて／流血を避ける者は呪われよ。」であったといわれるが⁴²⁾、当時の年代記作者たちは、「かれらが到達した土地にまつわる旧約時代の歴史をひとくさり述べずには、報告の筆を進めることができなかつたと思われるほど、かれらの意識は深く旧約の世界と交流していた」⁴³⁾。さらには、大西洋という「大なる紅海」を渡って新大陸に乗り込んだ入植者たちが、また、パレスチナ人の住処であるヨルダン川西岸地区に入植する現代のイスラエル人が、自分たちを約束の地カナン(の征服者に重ね合わせたであろうことは、想像に難くない⁴⁴⁾。この点で、アメリカのジャーナリスト、グレース・ハルセルが、ヨルダン川西岸地区のイスラエル入植地のひとつ、テコアで経験したエピソード⁴⁵⁾は、まことに興味深い。彼女がそこで世話になったボビー・ブラウンなる人物は、祖父の代からアメリカに住んでいたが、テコアに入植し、自ら銃をかざしてパレスチナ人から土地を奪ったのである。彼は、「主はこの土地を私たちに下さったんだ——私たちユダヤ人にね」とハルセルに語ったという。

旧約聖書は、古代キリスト教にとって、掛け替えのない資産であるとともに、大いなる負債でもあったのである⁴⁶⁾。

Ⅲ 古代キリスト教

では古代キリスト教は、平和主義的であったのだろうか。そうだというのが普通の答えであろう。福音書に描かれるイエスは、確かに、平和の使信を携えてこの世に遣わされた感が深く、よく知られている「山上の垂訓」の一節、「平和を実現する人々は、幸いである、その人々は神の子と呼ばれる」⁴⁷⁾という言葉など、素朴ゆえに力強さに満ちており、今でも読む者に深い感動を与える。しかし、福音書のいくつかの箇所に見れるイエスを、そのまま古代キリスト教の現実の姿と解することはできない。

この時代のキリスト教は、思想史家エルンスト・トレルチによれば、社会改良的な志向を持ち合わせてはいなかった⁴⁸⁾。彼らの態度は、一種の「出世間主義」「脱世間主義」であり、間近に迫った(はずの)キリスト再臨を待ち望み、現世を影のように儂く無価値なものとしたのであった。信徒の真の住処は、現世ではなく神の国にこそある⁴⁹⁾。もしそうであるなら、戦争や騒乱も、悲しむべき出来事には違いないが、他の多くの悲しみとともに、淀みに浮かぶ泡沫のように、かつ消えかつ結んで、幻の如くに過ぎ去っていくだけであろう。

しかし、こうした「厭離穢土欣求浄土」の思想に徹し、ひたすらに現身^{うつしみ}の儂さを嘆くのみであったならば、キリスト教はついに、エッセネ派のように、純粹だが社会の一隅にしか身の置き所のない変人の集団として、歴史の舞台から消え去っていたに違いない。「人生に相渉る」術を身に付けてこそ、キリスト教の飛躍がはじめて可能になったのである。ただ、古代教会の信徒たちが、「戦争反対だけでは世渡りもなるまい」という態度をとったであろう、などと早とちりをしてはならない。

そもそも、社会の片隅のカルト集団でしかなかった古代キリスト教が、戦争の是非などという天下国家の問題を論じてみたところで、詮無きことではなかったろうか。確かに、現実に権力の座にあることと政治について思索し語ることは、一応別の事柄ではあろう。江戸時代の儒者や学者の多くは、市井の一市民として陋巷に隠棲し、士大夫の本来のあり方たる官途に就く機会をまったく与えられず、それどころかその少なからざる部分が町人であったし、ヨーロッパにおいても、例えばスピノザのように、政治思想史に名を残した大家がしばしば隠遁者の如き生を送った。しかしこれは、「政治語り」が一種の「芸能」として認知され、彼らがそうした「芸能者」として世を渡ることができる外的環境があったからであろう。古代キリスト教はそうではない。外からは迫害を

受け、内にあっては、キリスト再臨の望みが時とともに次第に薄れていくという厳しい現実に直面して、信仰共同体を維持していただくだけで精一杯であったに違いない。パウロの書簡の迸るような熱誠は、このことを逆説的に表しているといえよう。

それに、彼らが平和主義的であったか否かを問う前に、キリスト教の内外を問わず、当時、近代人がイメージするような意味での平和主義という概念が存在したのか、が問われなければならない。ドイン・ドーソンが指摘するように、近代以前の人々にとっては、戦争は現世の通常のあるやうであって、自然の巨大な力のひとつとして運命的に受け入れられていたのであり、戦争に対する強い厭悪の念が表明されていても、それは災害に対する嘆きにも似たものであった⁵⁰⁾。古代キリスト教が平和主義的であったか否か、という問いそれ自体、20世紀に入って、それも主としては第一次世界大戦の古今未曾有の戦禍に見舞われてはじめて、欧米人の口から発せられるようになったのである。

こうした状況の下で、古代教会が平和主義的であったか否かという問いは、玉座の高みから戦争の是非善悪をいかに論じたか、ではなく、信徒が兵士となって戦場で人を殺すことが許容されていたか否か、を問うことにほかならない。そして、結論からいえば、この問いに対しては、過去1世紀にわたって論争がなされ、今日なお決着を見ないのである。

一方の側に、軍役従事の是非に関する古代教会の著述家たちの見解はさまざまで、軍役否認に固まっていたとはいえない、とする立場がある。この派の最近の驍将のひとりがジョン・シーンであるが、彼によれば、イエスの死から少なくとも4世紀のキリスト教公認までの間、統一的な組織と教義とをもった単一の「ザ・キリスト教」なるものは存在しなかったのであって、教義や祭儀に流派間で相当の違いを生じていたと推測され⁵¹⁾、軍役従事に関しても、異論を許さないような教義が存在したとは思われず、さまざまな信徒が、さまざまな場所で、さまざまに論じていたまでであろうと思われる⁵²⁾。

確かに、325年のニカエア公会議を想起するまでもなく、教義の統一は、教会が国家権力と密に提携するようになって（つまりは、暴力を背景とするようになって）はじめて可能となったのであり、帝国の広大な領土の各所に散在していたもろもろのキリスト教会の間から軍役忌避の教義が自ずから立ち上り、それが統一的信条にまで結晶化された、などとは容易に信じ難い。

文献を見ても、問題の困難が解決されるわけではない。そもそも新約聖書の記述からして両義的であった。そこには、平和志向の記述が多く見られる傍らで、軍役を積極的

に是認していると解される箇所もあるからである。イエス自身、百人隊長に請われてその部下の病気を癒しているばかりでなく、百人隊長自身を信仰の模範として褒めたし、使徒ペトロは、「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で信仰心の篤いコルネリウスやその一統に洗礼を受けさせようとした⁵³⁾。

また、概ね2世紀以後の（つまりは、新約聖書の福音書や諸書簡が一応成立して以後の）教会の著述家たちの作品群も、それらが、当局への弁明や、異端・異教に対する反駁という、「実用的な」目的で書かれたことからして、当然ながら相互に整合しない記述を含んでおり、後世の読者に解釈の余地を残している。彼らの置かれた環境を想像すれば、ローマの平和は彼らの宣教にとっても格好の条件であったはずで、帝国が神の救済計画の欠くべからざる道具として映っていたであろう。してみれば、帝国の強大な軍事力が、教会の教勢拡大を陰で支えている、という認識があっても不思議ではない。オリゲネスは、多数の国々を統一したアウグストゥスの時代にイエスが生まれたからこそ、その教えが全世界に広められたと述べている⁵⁴⁾。

かくして、彼らの筆致もまた両義的とならざるを得ない。テルトゥリアヌスは、その平和志向の強さで知られている一方で、キリスト信徒が、世の終わりまで帝国が存続することを確信し、また願ひ、「皇帝の生命の長からんことを祈り、帝国の平和、家内の安全、強力な軍隊、忠節な議会、立派な国民、平穏な世界など、人々や皇帝の望むものはすべて祈っている」、と述べた⁵⁵⁾。もちろん、彼の軍役忌避の思想は一貫しているが、それが、戦闘すなわち殺人・流血という職務自体を忌避したものなのか、ローマの軍隊において行われていた軍旗や皇帝の肖像に対する敬礼を偶像崇拜として忌避したものなのか、にわかには判別し難い⁵⁶⁾。

他方、近年のこうした「修正主義的」な解釈に対して強く異を唱えるのが、ロナルド・サイダーである。彼は、今日まで伝存する文献・墓碑銘の類を洗いざらい調べ上げた上で、古代教会の著述家たちの記述に見られる両義性や曖昧さを強調するのは誤っていると主張する。戦闘のほか、死刑の執行、墮胎を含む殺人を正面からは是認する記述は、現存資料には見出されず、むしろ、信徒が人を殺すことを否認している記述は随所に見出される。サイダーの踏査の結果は、次のようである⁵⁷⁾。

9人のキリスト教著述家が、16の論稿で殺人は誤りだと明言している。4人が5つの論稿中で、キリスト信徒は軍隊に入隊せず、また入隊すべきでないとはっきり述べている。加えて、4人の著述家が8つの作品中で、キリスト信徒は軍隊に入隊すべきでないと強く示唆している。5人の著述家が少なくとも8箇所、イザヤ書2章4節の「剣が打ち直されて鋤となる」

という預言を、キリストとその教えの予型と見ている。10人の著述家が少なくとも28箇所、「敵を愛せ」というイエスの教えを引用し、あるいはそれに言及しているし、うち少なくとも9箇所、この教えを、キリスト信徒は平和的で戦争を知らず他人を攻めることに反対し云々といった言説に結び付けている。これらすべてが、相当程度の合意の存在を示すものである。

サイダーが強調するのは、謎めいた人物、ローマの聖ヒッポリュトス（170頃－235）に帰せられる「使徒伝承」の重要性である。古代地中海世界の各国語に訳されて広く流布したと思われるこの書物の中では、権力のもとにある兵士は人を殺してはならず、人を殺すよう命令されても実行してはならないし、誓ってもならないのであって、それを拒めば、教会からは拒まれる、と明言されている⁵⁸⁾。そしてサイダーは、殺人に関する古代キリスト教著述家の著作、信徒の墓碑銘などを網羅的に採録した史料集の結論部分で、研究結果を要約しているが、本稿の当面の関心に沿って摘記すれば、次のようである⁵⁹⁾。

- ① 人を殺すことがキリスト教徒に許される、と明言した著述家は、現存史料においては見当たらない。
- ② キリスト教作家の著作において、信徒は、人を殺してはならない（あるいは、殺さない）、軍役に服してはならない（あるいは服さない）、と明言した箇所は多数に上る。
- ③ 殺人禁止の範囲は広く、戦争のほか、墮胎、嬰兒殺、死刑、剣闘にも及んでいる。
- ④ 軍役忌避の理由をもっぱら偶像崇拜に求めることは、正確ではない。
- ⑤ 結果として、古代キリスト教の殺人に関する記述は曖昧で、見解も分かれている、という認識は当たらない。

膨大な研究の蓄積を鳥瞰する能力が私にないことはいままでもないが、少なくとも次の点は指摘できよう。

第一に、その作品が今日にまで伝えられているような教会内の知的エリートたちの間で、確立された統一された教義などとは呼べないにしても、軍役（あるいはより広く殺人一般）に対する忌避感が共有されていたことは、まず疑いがないように思われる。そしてその限りで、古代キリスト教における平和志向を語るものが許されるであろう。実際、新約聖書中の、次のような人口に膾炙した若干の聖句を見ただけで、そこに平和への強い希求を感じとることができる。

悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けな

い⁶⁰⁾。

だけれが、1ミليون行くように強いるなら、一緒に2ミليون行きなさい⁶¹⁾。

あなたがたも聞いているとおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい⁶²⁾。

人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである⁶³⁾。

剣をさやに納めなさい。剣を取る物は皆、剣で滅びる⁶⁴⁾。

愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります⁶⁵⁾。

これらの素朴ゆえに力強い言葉が、どれほど大きな感銘を人々に与えてきたかは、後世の学者、例えば、有名な『教令集』（1140年頃）を編んだグラティアヌスが、暴力の行使を一定の限度で許容する文脈の中で、これらの聖句を「無害化」するために陳弁これ努めている⁶⁶⁾ 事実、逆説的に示されている。

しかし第二に、教勢の拡大に伴って、現実との妥協が生じていたことは容易に想像される。すでに2世紀後半に事実としてキリスト信徒が帝国の軍隊内にいたことがよく指摘されるが、社会学者ロドニー・スタークは、キリスト教徒人口とそれが総人口に占める割合とが、次のように拡大していったと推計している⁶⁷⁾。

表 キリスト教の拡大

西暦	教徒数	総人口比 (%)
40	1,000	0.002
50	1,400	0.002
100	7,530	0.013
150	40,496	0.07
200	217,795	0.36
250	1,171,356	1.9
300	6,299,832	10.5
350	33,882,008	56.5

イエスの死の直後、紀元後40年に1000人で始まったものが、10年間で4割増という近代のモルモン教と同じくらいのペースで拡大していったとすれば、という強い仮定に基づいた推計であるから、いくらかでも反論の余地はあろうが、他の推計とも整合的だ

という評価もある⁶⁸⁾。この推計が正しいとすれば、信徒数がわずかに千のオーダーにすぎなかった1世紀終盤に、新約聖書の福音書や諸書簡が成立したことになるが、そのことからしてひとつの奇蹟というべきではなかろうか。奇蹟といえば、大工の小倅を神の子だと言い募る珍妙なカルトが、徐々にはいえ追随者を増やしていったことが、そもそも驚くべきことであった。生前のイエスや使徒たちを直に知っていた世代の信徒は、自分たちが生きている間にキリストが再臨するだろうと思っていたらしく、聖書にもそれを示唆する記述がある。

はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない⁶⁹⁾。

その期待がどうやら空振りに終わったらしいと気づいたとき、信仰の根幹に揺らぎが生じたに違いない。聖書にもはっきりそう記されている。

終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけて、こう言います。「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のこととは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。」⁷⁰⁾

この危機をいかにして克服したのか、私などに分かつてははずもない。しかし、2世紀前半に信徒数は万のオーダーを超え、一応、クリティカル・マスが獲得されたようであり、良かれ悪しかれ、再臨を待望する緊張感は薄れ、かえって最後の審判の日に対する恐れが洩れるようになる⁷¹⁾。いずれにせよ、全人口の1割を占めるに至れば、信徒の中にほとんどあらゆる職業・身分の者が混じってくるであろうから、そこに軍人が存在しないはずがない。キリスト教徒が全人口の1パーセントに満たない日本でさえ、防衛関係者の信徒団体「コルネリオ会」が活動しているのである⁷²⁾。

第三に、いうまでもないことながら、状況はいわゆる「コンスタンティヌス革命」(Constantine Revolution)によって一変した。皇帝自身が、キリストの旗の下に軍隊を率いて敵と戦ったのである。軍隊ばかりでなく帝国の社会全体が急速にキリスト教化されたことは、上記のスタークの表からも窺い知れよう。現実の前には教会内の思潮にも変化が訪れざるを得なかったに違いない。それは、ラクタンティウス(250頃-325頃)が、4世紀はじめ、おそらくはディオクレティアヌス帝(245頃-313頃、在位284-305)のキリスト教迫害がなお続いていた時期には、「殺すなかれ」という十誡の第六誡を字義通りに解して、殺人一般、したがって軍役従事も死刑の執行もキリスト信徒には禁止さ

れると説き、愛国心をも善とは見なしていなかったのに対して、コンスタンティヌスが改宗し、自らその皇子の傅育官に任命されるに及んで、軍役への忌避を語るのをやめ、祖国のために戦う際の勇気を賞賛するようになった⁷³⁾ ことに示されるように、驚くほど短い期間のうちに生じた可能性がある。

有名な『教会史』を著したカイサリアのエウセビオス(260頃-339頃)が、ローマ近郊のミルウィウス橋の決戦でコンスタンティヌスがマクセンティウスを敗死せしめた際、小舟を連ねた橋からマクセンティウスやその兵士たちが落下して溺死する様を、モーセらを追うファラオの軍勢が紅海に飲み込まれる旧約聖書の物語⁷⁴⁾を引きつつ小気味良げに語っている⁷⁵⁾のを読むとき、その感を一層深くする。

4世紀にキリスト教は、外にあっては、世俗の権力(帝国当局)によって公認・国教化され、内にあっては、君主的司教が支配する制度化された教会、いわば造物としての教会が組織形態として確立されて、正統と異端とを弁別する権力を行使するようになった。二重の意味での体制化といえよう。古代的な平和主義の面影をいまだ止めていたとはいえ、体制そのものとなったキリスト教が、軍役従事を全面的に禁止できるはずもない。ミラノ勅令直後のアルル宗教会議(314年)の決議第3条は、信徒たる兵士が平時において武器を放棄することを禁止した⁷⁶⁾。秩序の弛緩し始めた帝国を預かるコンスタンティヌスにとって、キリスト教は実は最大の関心事ではなかった⁷⁷⁾のかも知れないが、キリスト教を軍隊における勝利の宗教として確立したことは確かである⁷⁸⁾。「コンスタンティヌス帝の即位とともに、教会史上の平和主義の時代は、終わりを告げる」⁷⁹⁾というベイントンの感慨も、理解できよう。

コンスタンティヌス革命から1世紀近くを経たころ、アウグスティヌスは、今日のチュニジアにあるヒッポ・レギウス(Hippo Regius)という町の司教であった。戦争や軍役に関する議論は、彼の膨大でポレミカルな著作の随所に、しかし大抵は断片的に現れるが、もはやキリスト信徒の軍役従事を肯定することに躊躇はない。アウグスティヌスは、すべての権威の神的由来を強調する新約聖書の教え⁸⁰⁾に忠実に、国家権力の正当性をひとまずは是認する立場であり、したがって、国法の命によって犯罪者を死刑に処することは、「殺す勿れ」と命ずる律法に背くものではない⁸¹⁾。次の一節で彼は、ほとんどあからさまに国家による暴力の行使を容認している⁸²⁾。

皇帝の権力、判官の剣の権限、処刑吏の鉄鉤、兵士らの武具、主人が奴隷に課す懲戒、さらには良き父の厳格さ、これらはいずれも言われなくつくられた力ではありません。これらはみなそれぞれ、間尺があり、原因があり、理由があり、そして効能があります。これらは恐れを

喚起するので、悪人が抑制され、善人は、悪人の間にあって安んじて暮らすことができるのです。

たまたま大ローマ帝国の崩壊期に公的人生を送ったアウグスティヌスにしてみれば、秩序の最後の担い手として国家による暴力に依存するしかなかったとしても、無理もなからう。皇帝でさえ、一再ならず辺境の前線にあって陣没した時代である。また、彼が当時のキリスト教思想のすべてを代表しているわけでもない。しかし、古代キリスト教の平和主義が重大な岐路に立たされたことは、否定すべくもないといえよう。

IV 寓意的聖書解釈

繰り返しになるが、旧約聖書は、キリスト教がユダヤ教に胚胎し、しかもそこから出て自己形成するための不可欠の素材であったが、古代キリスト教が平和主義であったとすれば、その好戦的な記述は容易ならざる負債でもあった。旧約のいわば「無害化」が、この時期の著述家たちの重大な課題となったのである。無害化の方法論にはいくつもあって、すでに紹介した予型論もそうした機能を果たすことがあったが、より大規模に動員されたのは、寓意的解釈 (allegorical interpretation) である⁸³⁾。その意味について、定義めいた説明を与えるよりも、大家の実例を挙げた方が適切であろう。大家とは、すでに幾度か登場してもらったオリゲネスである。

まず彼もまた、古代教父に相応しく平和主義者であったことを確認しておこう。キリスト教を愚民の信仰として嘲笑するギリシア哲学者ケルススに反論する——といても、ケルススは、オリゲネスが著述活動をしていたころには、疾うに死んでいたのではあるが——「ケルスス駁論」から引用する。軍隊に入って皇帝のために戦うべきだと言ひ募るケルススに対して、オリゲネスは次のように答えた⁸⁴⁾。

この問いに対してわれらは次のように答えよう。時至らば、われらは、「神の武具」(エフェソ書6章11節)を身に着けて皇帝に神の助力をもたらすであろう。「まずは祈りと執り成しと願いと感謝とを、すべての人、分けても皇帝や高官たちのために捧げよ」(テモテ前書1章1-2節)という使徒の助言に従って、われらはそうするのである。間違いなく、人は敬虔であればあるほど、より有効に皇帝を助けることができる。出征して、戦線でできるだけ多くの敵を殺す軍隊よりなお有効に、である。

一読して明らかなように、オリゲネスは忠良なる帝国臣民として、皇帝の軍事的栄光を称賛しこそすれ何ら否定していない。Ⅲで述べたように、ここでの平和主義とは、戦争否定論ではなく、信徒の軍役従事否定論なのである。しかし、そうした限定的な意味に解するにせよ、旧約聖書の記述を文字通りに受け取れば、戦争否定はおろか、軍役不従事も大罪に当たるはずで、モーセやヨシュアのような智謀勇武の将帥の下、果敢に戦ってこそ信徒の本分を尽くしたことになるであろう。

これに対してオリゲネスは、彼の名とともに著名な寓意的解釈を持ち出して防衛線を敷こうとする。すなわち、人間が、体・魂・霊の三部分からなっているように、それに対応して聖書の叙述も、字義的・道徳的・霊的の三層からなっている、というのである。古代キリスト教の、あるいはもっと広く、古代の知的営み全般の、雰囲気といったものを知る上でも重要だと思われるので、「諸原理について」のよく知られた箇所を、長大に互るが煩を厭わず引用しよう⁸⁵⁾。

……聖書を理解し、その意味を求めるために、私が正当と思う方法は、聖書それ自体がその理解に関して教えている方法である。

ソロモンの格言の書の中には、聖書の〔理解にあたって〕遵守すべき原則のようなものが明言されている。「あなたは思慮深さと学識をもって、これらのことを三回、あなたのために書き記しなさい。それは、あなたに問いただす人々に真理の言葉をもって答えるためである」⁸⁶⁾と。したがって、各自がその魂のうちに聖書の理解を三回記すべきなのである。それは、まず単純な人々が、いわば聖書のからだそのもの——聖書の普通の歴史的な意味を、ここで聖書のからだと呼んでいる——によって教化されるためであり、次にある程度進歩し始め、より一層深く洞察しうる人々が聖書の魂そのものによって教化されるためであり、ついに完全な人々、使徒〔パウロ〕が「しかし我々は完全な人々の間では知恵を語る。この知恵は、この世のものではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。むしろ我々が語るのは、隠された秘儀としての神の知恵である。それは神が、我々の受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである」と言っているような人々が、「来るべき良いことかげの陰影をやどす」霊的律法によって、いわば霊によって教化されるためである。したがって、人間が身体と魂と霊によって構成されていると言われるように、人間の救いのために神の賜物として与えられた聖書も〔同様に構成されているのである〕。

もちろん、聖書には、字義通りに読めばよい章句もたくさんある。「例えば、ヘブロンヘブロンの二つに分かれたほら穴にアブラハムは葬られ、イサクとヤコブもそれぞれ妻と共に

葬られたのを否定できる人が誰かあろうか」⁸⁷⁾。これが、聖書の「体」に当たる。また、比喩を用いつつも、誰にでもわかる道徳的訓戒がなされている箇所もある。「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」というパウロの戒め⁸⁸⁾がその例であって、これが聖書の「魂」に当たる。

ところが聖書には、字義通りに読もうとすると意味をなさない個所がある。例えば天地創造に当たって、「太陽も月も星もなく、第一日目には天すら存在しなかったのに、「第一日」、「第二日」、「第三日」と言われ、おまけに「朝」と「晩」とがあったとされているのを、合理的であると解釈する人が誰かいるだろうか」⁸⁹⁾。同様に不合理な章句は、福音書にも見出される⁹⁰⁾。

また「誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けてやりなさい」と命じられているのも〔合理性に欠けている〕。というのは、人々は右の手を使って殴るのであり、すると〔右の頬ではなく、先に〕左の頬を殴ることになるからである。

しかし、聖書は一点一画に至るまで誤りなき真理を伝える書であるから、一見不合理な記述の底に奥深い意味が秘められているはずであり、そうした霊的な意味を探るためにこそ寓意的解釈が力を発揮する。上のマタイ福音書の有名な章句については、その注釈が散佚してしまったらしく、オリゲネスが具体的にどのような霊的解釈を施したのかは分からないので、字義通りに読むと不合理であるいまひとつの例として、ヨルダン川渡渉後、ヨシユアが神から、「火打ち石の刃物を作り、もう一度イスラエルの人々に割礼を施せ」と命ぜられた箇所⁹¹⁾を挙げておこう。ここでオリゲネスは、「この岩こそキリストだったのです」という新約の一節⁹²⁾を引いて、物理的にはあり得ない再度の割礼に、福音による浄化という霊的な意味づけを与えている⁹³⁾。個別の例はともかくとして、聖書は、こうした辻褃の合わない箇所や不道徳な箇所を意図的に挿入して、読み手に、文字の奥底にあるより深い意味を探求すべく、多くの努力と辛苦を重ねさせようとしているのである。

では、旧約聖書の戦争譚にも、霊的な解釈は可能なのであろうか。オリゲネス自身が認めるように、聖書には「不思議な方法で様々の戦闘が叙述され、ある時は負け、ある時は勝つという様が描写されて」⁹⁴⁾おり、そのため、「単純な人々のうちのある者は、……これ以上不正で荒々しい者はいないと思われる人にさえ帰してはならないようなことを、この神に帰している」⁹⁵⁾とすれば、事は急を要するであろう。単純な人々ばかりではない。学識あるケルソスが、次のように指摘しているのである⁹⁶⁾。

もしもユダヤ人の神がつかわした預言者たちが、イエスについて彼がその神の子であることを真に予言していたとしたら、次のことはどうして理解できるであろうか。すなわち、ユダヤの神はモーセをとおしてかれらに、富を集め、自分の国を広め、全地を満たし、敵を子どもまで殺害して全滅するよう命じたのである。さらに、敵を全滅させよとの命にユダヤ人たちが従わなければ、神はかれらを全滅するとおどしたのである。神がこのような掟を与えたにもかかわらず、あのナザレ人であるかれの子は、これとは全く反対な掟を与えたのである。ナザレ人はすなわち、富者や、自分の地位・才能・栄誉に愛着している人々は御父に近づくことができないと言い、人は鳥以上に食物を得ることに心をくばってはならないこと、野の花よりも衣服を得ようと努力すべきでないこと、また、人から打られるとさらに打られるように自身をさし出すことを教えたのである。それでは、どちらが虚言を述べたのであろうか。モーセであろうか、それともイエスであろうか。あるいは御父はイエスをつかわされたとき、先にモーセに与えた掟を忘れられたのであろうか。

印象深く、ほとんど美しいといってよいほどの章句である。ケルススはギリシアの異教徒ながら、旧約・新約双方の、それも「勘所」に通じ、また、イエスの言葉に共感を覚えていたらしい。それにしても、キリスト教の最も痛いところを突く指摘であり、それだけにオリゲネスは、得意の寓意的解釈法を駆使して次のように反論した⁹⁷⁾。

敵を殺戮すべしというユダヤ人になされた約束についていえば、この箇所の意味を注意深く考える者は誰も、これを字義通りに解釈し得ないことに気づくであろう、と答えよう。取り敢えずは、詩篇〔101 篇 8 節〕において、義人があろうことか、「朝ごとに、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし／悪を行う者をことごとく、主の都から絶ちます。」と語っている様に思いを致せば足りるであろう。話者の言葉と精神からして、詩篇の先行する箇所で誰にでも分かる気高い思想と目的とを語っておきながら、義人がその直後に、言葉そのままの意味合いで、一日のほかの時間ではなくまさに朝に、すべての罪人を地上から根絶やしにします、誰も生かしてはおきません、イエルサレムの不正を働く者は皆殺しにします、などというものかどうか、考えても見よ。

そして、「この地」とは、神意に背く欲望をもった肉体を、「主の都」とは、神の真の姿を宿す義人の魂を意味するのである⁹⁸⁾。

ヨシユア記に記録された戦いにも、もちろん、霊的な意義が見出され、それによって、その好戦性は、霊的に浄化される⁹⁹⁾。

これらの実際の戦争が霊的戦いの比喩の意味をもっていないのだとすれば、ユダヤ人の歴史の書は、使徒らの手から、平和を説くために来たキリストの弟子たちに、教会で読まれるべきものとして伝えられることはなかったであろう。イエスは弟子たちに、「わたしは、平和をあなたがたに与え、わたしの平和をあなた方に残す」¹⁰⁰⁾ といい、使徒らを通して「自分で復讐するな」¹⁰¹⁾、「むしろ、不義を甘んじて受けよ」、「奪われるままでいよ」¹⁰²⁾、と命じたのである。そのイエスの弟子たちにとって、戦争を描くことに何の意味があったであろうか。要するに、パウロは、われわれは今や現実の戦争をする必要はなく、霊的敵対者たちに対して魂の戦いを遂行しなければならないことを知っていたので、軍隊の指揮官のごとく、キリストの兵士らに向かって、「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい」¹⁰³⁾、と命じているのである。

書物としての聖書にも、原著者がおり、その写本は写字生らが製作したのであるから、人間の手になったものであることはいうまでもない。しかし、彼らの手はあくまでも聖霊が導いたのである。オリゲネスはじめ当時の知識人にとって、聖書を読むとは、それがいかなる環境あるいは文脈で書かれたのかを問うことではなく、文字の背後にある霊的世界へ自ら参入することであった。それは、現代人が考える読書であるよりも、むしろ祈りに近い行為であったろう。彼らは、自らと人類の救済の可能性を賭してテキストと格闘したのである。

V 現代からの回顧

オリゲネス流の寓意的解釈が、現代人にそのまま受け入れられることはあるまい。眉唾ものではあるが、オリゲネスには、マタイ福音書 19 章 12 節の記述を文字通りに受け止めて自ら去勢した、などというゴシップまがいのエピソード¹⁰⁴⁾もあるほどであるから、万事に道学者の臭味が染み渡るのも宜なるかな、である。しかしそれにしても、祝婚歌であって旧新約を通して最も色っぽい「雅歌」の一節、「王はわたしをご自分のねやに連れて行かれました。私たちはあなたによって喜び楽しめます」(1 章 4 節)の下りまで、キリストと教会との関係の比喩であるなどと「霊的」に解釈¹⁰⁵⁾されてしまっただけでは、身も蓋もない。それどころか、幼稚である、恣意的であるといった批判がこうした解釈に付きまとっていることは、ほかならぬ彼自身がよく知っていた¹⁰⁶⁾。

しかし、現代の視点をもって過去を断罪し嘲笑してはならないという作法は、ここで

も当てはまる。ユダヤ教の学者たちが、ギリシア哲学はモーセに依拠していると考え、プラトンがエジプトを訪れ、「モーセ五書」の写本を読んだ、などと大真面目に唱えていた時代のことである。それに、寓意的解釈という手法自体は、アリストテレスも採用していた¹⁰⁷⁾といわれ、テキストへ知的に接近するための、ヘレニズム世界ではありふれた方法であった。オリゲネスの寓意的解釈の先蹤は、しばしば、イエスのほぼ同時代人のユダヤ教徒、アレクサンドリアのフィロン（前30頃-後40頃）に求められる¹⁰⁸⁾が、このことは、解釈の手法が、信仰の異なりをも横断し得たことを物語る。実際、世界的な教父学者、ヘンリー・チャドウィックが指摘するように、現代人は寓意的解釈を不誠実な詭弁だと見なしがちであるが、これによって、「古代の文章が同時代にも通じるものとしてどれほど蘇生しえたか、また、人間の思考が硬直した権威主義から解放されて、どれほど自由に発展することができたか」を正当に評価しなければならない¹⁰⁹⁾。現代人が、古代人の心を心としようとしてもできない相談であるにせよ、時代の直面する問題を真摯に考え抜いた碩学たちの言葉に、いま少し共感と敬意とをもって接するべきであろう。そして、オリゲネス流の寓意的解釈に当てはまることは、彼を含む古代キリスト教の著述家たちの平和主義にも当てはまるはずである。

確かに、キリスト教の公認・国教化に伴って、その平和主義は、おそらくは急速に衰微した。どう言い繕おうと、キリスト教は現実に妥協したのである。旧約聖書の戦争譚を寓意的に解釈すべく千万言を費やしたオリゲネスの努力も、空しかったかに見える。してみれば、淵田美津雄の人生の背景に古代キリスト教のありようを覗き見ようとした本稿は、その志において我ながら壮とするに足るところがあったとはいえ、専門家ならば空で言えるような文献をあれこれ捻くり回した挙句、結局は、調べ物をしようがすまいがはじめから分かりきったことを確認し得たにすぎないこととなろう。体制宗教に、戦争と軍事から無縁であるなどという贅沢な境遇は許されないのである。この貧しい結論は、宗教ばかりでなく思想、文学、芸術その他文物百般に当てはまる。いわゆる「護憲派」は、憲法9条が現実と妥協せざるを得なくなる様を長きに渡って慨嘆してきたが、体制そのものである憲法がどうして平和主義を純一に貫くことができようか。

しかし、古代末をもってキリスト教の平和主義の伝統が死に絶えたと考えるならば、なお早計である。Iで紹介したマルティヌスの逸話は、国教化のプロセスの中であってさえ、軍役忌避の感覚がしぶとく生き残っていたことを示唆する。また、ウインの紹介するところによれば、官吏であった者が聖職に就き得るか、就き得るとしていかなる要件の下でか、が依然として議論されていたし、兵士が、信仰ゆえに満期前に除隊を申し出た事績（それは、時に生命の危険を伴う言動であった）が賞賛されていた¹¹⁰⁾。

Ⅲで述べたように、古代キリスト教の平和主義は、アウグスティヌスの手によって葬り去られたように見えるが、彼も、現代人の目からは驚くべきことに、今日でいう正当防衛としての殺人を許容しなかった。396年から翌年にかけて、彼とローマの元老院議員プブリコラとの間で、書信の往還があったが、プブリコラが、蛮人であれローマ人であれ、自分を殺そうとしている者がいる場合、キリスト信徒としては、自分が殺されないようにするために攻撃者を殺してもよいか、と尋ねてきた¹¹¹⁾のに対して、アウグスティヌスは、「だれでも人々によって殺されるかも知れないと恐れて、人々が殺されるように忠告することを私は是認しません」と、実ににべもない口調で答えている¹¹²⁾。是認しない理由は詳述されていないが、思うに、生命といえども本来は自己目的として追求すべきものではない以上、これに執着することもまた私欲 (*libido*) の表れなのであって、それに動機付けられた自己防衛のための殺人もまた許されない、と考えられたためであろう。「暴力はあらゆる自己利益から切り離されねばならない」¹¹³⁾のである¹¹⁴⁾。文字通り、秋霜烈日のごとき倫理観といえよう。平和を希求し続けたことと、ニカエア公会議以後の何回かの公会議において教義を公定化する過程で、信仰の多様性を失いつつも、一人ひとりの人間の「個」を析出していった¹¹⁵⁾こととは、古代キリスト教が残した重大な遺産であった。

確かに、平和を願った人々の努力は、彼らが地上の生を享けている間には実を結ばなかった。しかし、彼らは、人生を通じて無駄骨を折っただけだったなどとは、つゆほども思わなかったに違いない。オリゲネスは、存在の根源への渴望はすべての人間に普遍的に備わっており、このうずくような欠乏感は、もし満足される見込みがないものなら、人間の心の中に植えつけられるはずがなかった、と述べたという¹¹⁶⁾。この論法に倣うなら、地上の平和がおよそ実現不可能であるならば、神は人間の心に平和への焼け付くような希求を植えつけることはなかったであろう。そう信ずればこそ、オリゲネスは、寝台ではなく床に伏して睡眠を切り詰め、聖書のほとんどの文書に注釈を加え、アウグスティヌスは、蛮族の軍勢の蹄の音が迫る中で、地上の平和の貴重さを、それが天の国の平和に比していかにも不完全であることを熟知しながら説き続け、さらにわれらの愛すべきヒーロー、キャプテン・フチダは、晩年糖尿病に悩まされながらも、死のほんの数年前まで、全世界を股にかけた伝道の旅を止めなかったのである。

注

- 1) 同会の主な活動については、そのホームページ《<http://www.hagemashi.com/plan.html>》を参照されたい。

- 2) 自伝に、淵田美津雄（中田整一編・解説）『真珠湾攻撃総隊長の回想 淵田美津雄自叙伝』（講談社文庫、2010年）があり、また、文献に加えて、本人および関係者への膨大なインタビューに基づいて書かれた評伝、Gordon W. Prange, *God's Samurai* (Brassey's (US), Inc., 1990) がある。Prangeは、おそらく、「ブランジ」「ブレインジ」に近く発音されると思われるが、日本ではもっぱら「ランゲ」と呼び做わされてきた。アメリカにおける太平洋戦争史の第一人者であり、そのコレクションである「ランゲ文庫」が占領期研究の資料の宝庫であることは、改めて紹介するまでもない。
- 3) 正式の補職は、空母「赤城」飛行隊長であったようである。淵田・前出注2、91-94頁。
- 4) 最近、このエピソードは淵田の作り話であるという説が戦史家から出されている。Jonathan Parshall, *Reflecting on Fuchida, or "A tale of Three Whoppers"*, *Naval War College Review*, vol.63, no.2 (2010), 134-136. 私は、この説に大いに説得力があると感ずるものであるが、ここではこれ以上立ち入らない。
- 5) 淵田・前出注2、463-471頁。
- 6) Phillip Wynn, *Augustine on War and Military Service* (Fortress Press, 2013), 110-111, 120. スルビキウス・セウエルス（橋本龍幸訳）「聖マルティヌス伝」上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』（平凡社、1999年）893-894頁（原典4章）。
- 7) Prange, *supra* note 2, 180-183, 206.
- 8) 私事に互るが、私は、1997年に小橋孝一牧師（当時、日本基督教団霊南坂教会主任牧師）の司式によって洗礼（バプテスマ）を受けられた。受洗に至る不届き千万な動機については、以前に一文を草したことがある。安念潤司「私は何を信仰しているのだろうか」自由と正義64巻2号（2013年）5-7頁。不届きとはいえ信徒の端くれであるから、以下の記述では、キリスト教に対して無意識の好意的なバイアスがかかっている可能性がある。
- 9) カトリック中央協議会『第二バチカン公会議 現代世界憲章』（カトリック中央協議会、2014年）93-94頁。
- 10) 石川明人『キリスト教と戦争』（中公新書、2016年）37頁。
- 11) 石川・前出注10、40頁。
- 12) 石川・前出注10、188-191頁。
- 13) 日本基督教団「安全保障関連法可決に関する議長声明」（2015年10月28日付）《<http://uccj.org/news/22457.html>》。
- 14) 赤江達也『矢内原忠雄一戦争と知識人の使命』（岩波新書、2017年）xi頁。
- 15) 神の国の絶対的善の観点からすれば、正しい戦争などあり得ないが、地上の国の相対的善としては、戦争もまた肯定される場合がある。ただし、矢内原が義戦の例として挙げるのは、アメリカ独立戦争、オランダ独立戦争、ピューリタン革命の3つである。以上については、菊川美代子「矢内原忠雄の義戦論」基督教研究（同志社大学）71巻2号（2009年）67頁。
- 16) 赤江・前出注14、204頁。
- 17) G・A・リンドベック（田丸徳善監修、星川啓慈＝山梨有希子訳）『教理の本質』（ヨルダン社、2003年）162頁。
- 18) 石川明人『戦場の宗教、軍人の信仰』（八千代出版、2013年）1章。
- 19) その旗頭が、戦前のプロテスタント教界の代表的な指導者、海老名弾正である。後出・注40参照。
- 20) オリゲネス（小高毅訳）『諸原理について』（創文社、1978年）52頁（原典1巻1章1節）。
- 21) 《<http://www.csc.org.il/download/files/Origeniana%20program.pdf>》
- 22) もちろん、旧約聖書（ヘレニズム世界では、ヘブライ語からギリシャ語への翻訳である七十人訳聖書を意味する場合が多い）は、「今やキリストから、キリストを目指して解釈され、関係づけられねばなら」なくなり、「全面的な読み換え」がなされざるを得なくなった。K・バイシュラーク（掛川富康訳）『キリスト教教義史概説 上』（教文館、1996年）133頁。しかし、そうした「読

み換え」が、そうおいそれとできるはずもない。例えばキリスト教は、キリストの先在性、すなわち、キリストが受肉の前から、それも天地創造よりも前から永遠に存在し続けていることを、旧約聖書から論証しなければならなくなったが、ユダヤ教徒には、無理なこじつけとしか思えなかった。殉教者ユスティノス（100頃－165頃）は、彼と同じくヘレニズム的教養を十分に備えていたらしいユダヤ教徒トリュフォンに、「万物の創造者以外にさらにもうひとりの神〔キリスト教の立場では、子たるキリスト〕がいるということを君はどう証明できるのか」と迫られて、マムレの榿の木のところでアブラハムの天幕の前に現れた3人（創世記18章1-2節）のうちひとりがキリストだったのだと返答しているが、トリュフォンは無論、訝しげである。ユスティノス（久松英二訳）『ユダヤ人トリュフォンとの対話』上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』（平凡社、1995年）56-69頁（原典50-57章）。因みに、マムレの榿の木のエピソードは、アブラハムが99歳にして割礼を受けた話（17章24節）の直後に出てくるが、このとき、やはり老齢に達していた妻のサラが、来年には男の子を生むと告げられる（18章10節）。なお、マムレの榿の木の3人のうちのひとりがキリストだという解釈は、アウグスティヌスも無理筋だと考えていたようである。アウグスティヌス（泉治典ほか訳）『神の国 下』（教文館、2014年）170-172頁（原典16巻29章）。なお、本稿では、聖書からの引用は、日本聖書協会『聖書 新共同訳』（1987年）による。ただし、新約聖書の各文書の題名は、「マタイ福音書」「使徒行伝」「ロマ書」などの通称を用いる。

- 23) 加藤隆『『新約聖書』の誕生』（講談社選書メチエ、1999年）225頁は、紀元2世紀前半の状況として、口承のイエスと使徒の言葉は、旧約聖書と並んで神的規範を示すものとして扱われ、書かれたもののうち、福音書はまだ散発的とはいえ、旧約聖書に並ぶ権威をもつものとして使われ始めていた、と述べている。
- 24) E・J・グッドスピード（R・M・グラント補訂、石田学訳）『古代キリスト教文学入門』（教文館、1994年）11-12頁。またグッドスピードによれば、「福音書は、文学的先例を持たない、新しく創り出された文学類型であり、マルコによる福音書においてはじめて登場したものである」（77頁）。彼が、その無双の学殖で縦横無尽に語る正典外の福音書の世界は、豊穡の一語に尽きる。
- 25) マックス・ヴェーバー（内田芳明訳）『古代ユダヤ教（上）』（岩波文庫、1996年）22-23頁。
- 26) Jean Daniélou (Dom Wulstan Hibberd, trans.), *From Shadows to Reality* (orig. *Sacramentum Futuri*, Burns & Oates, 1960), 1-2. 例えば、ノアの洪水および箱舟の寓話は、キリスト教によって、洗礼（バプテスマ）の予型と解された（Book II, ch.1）。もちろん、予型論も、キリスト教の専売特許ではない。ユダヤ教内のピューリタンともいうべきクムラン教団では、自分たちの共同体に日々起こり来る事どもが、聖書（旧約のことであるのは、いうまでもない）に予表されていると考えていたらしい。William Yarchin, *History of Biblical Interpretation: A Reader* (Baker Academic, 2004), xiii-xiv, 9-11. また、聖書の神秘的な人物メルキゼデク（創世記14章18節、詩篇110篇4節、ヘブル書5章6節、7章1-17節）を予型とする終末論的な祭司王メシア像が、マカバイ時代あるいはユダヤ教黙示思想において待望されていたという考え方については、野本真也「メルキゼデク—その伝承と解釈」基督教研究（同志社大学）35巻2・3号（1967年）191-196頁。
- 27) キリスト教における「軍国主義」が論ぜられる所以である。ピーター・C・クレイギ（村田充八訳）『聖書と戦争』（すぐ書房、2001年）12-15頁。ヴェーバーによれば、イスラエルという「誓約同志共同態」そのものが「連合の戦争神であるヤハウェとの間に結ばれた、そしてヤハウェの指導下におこなわれた、一つの軍事連合だった」のである。ヴェーバー・前出注25, 212頁。さらに、ヤハウェは、「モーセの礼拝組織によってイスラエルの軍事的連合（Kriegsbund）のために新たに受容された神であった」（300頁）。民数記が徴兵のための人口調査について詳しく記述しているところを見れば、さもあらなと思われる。してみれば、旧約聖書が一種の軍律集成であったのも当然であろう。
- 28) 詳細は、秦剛平『聖書と殺戮の歴史 ヨシユアと士師の時代』（京都大学学術出版会、2011年）。同書によれば、ヨシユア記3章から12章までは、「『殺せや殺せ』のカナン侵攻の話」である

- (11-12 頁)。
- 29) ヨシユア記 6 章 21 節, 25 節。
- 30) ヨシユア記 8 章 29 節。
- 31) 創世記 4 章 8 節。旧約聖書は、子供に対しても少しも容赦がない。イスラエル王国第 9 代の王ヨラムの治世に、預言者エリシャが、エリコの町からベテルへと道を上っていったところ、町から小さな子供たちが出てきて、「はげ頭、上っていけ」とエリシャを嘲ったので、彼が振り向いてにらみつけ、主の名によって子供たちを呪うと、森の中から 2 頭の熊が現れて、子供たちのうち 42 人を引き裂いた (列王記下 2 章 23-24 節)。はげを笑うのもほどほどにしておかないと大量虐殺の憂き目に遭うのである。処世の教訓として心せねばなるまい。
- 32) 「聖絶」の観念については、山我哲雄「旧約聖書における「平和 (シャーローム)」の観念 (上)」北星論集 (北星学園大学経済学部) 29 号 (1992 年) 193-194 頁。
- 33) サムエル記上 15 章 2-3 節。
- 34) 士師記 11 章 14-27 節。John A. Wood, War in the Old Testament 《<http://www.baylor.edu/ifl/christianreflection/PeaceandWararticleWood.pdf>》, 15-16.
- 35) いわゆる「聖書考古学」の領分では夥しい文献があるが、本文で紹介したエリコとアイの攻略の史実性については、差し当たり、長谷川修一『聖書考古学』(中公新書, 2013 年) 110-113 頁。因みに、百戦百勝のごとき旧約戦記も、お寒い限りの内情をところどころで白状している。ヨシユアの死後も、ユダがエルサレムを占領するなど武勲を立てたが (士師記 1 章 8 節)、「平野の住民は鉄の戦車を持っていたので」、追い出すことができなかった (19 節)。古代イスラエル王国初代の王サウルの時代になっても、イスラエルにはどこにも鍛冶屋がおらず、鋤・鍬の類を研いでもらうには、あろうことか敵方のペリシテ人に頼むほかはなく、ために、戦いの日になっても、サウルとその息子ヨナタン指揮下の兵士は、誰も剣や槍を手にしていなかった (サムエル記上 13 章 19-22 節)。
- 36) オリゲネス (小高訳)・前出注 20, 297-298 頁 (原典 4 卷 3 章 2 節)。
- 37) 「戦いの規律」世界古文書研究会『解釈死海文書』(青谷舎, 1997 年) 85 頁以下。
- 38) しかし、近代に入っても、神命による戦争が定義上正戦である、という記述がなくなったわけではない。周圓「アルペリコ・ジェンティーリの正戦論」一橋法学 11 卷 1 号 (2012 年) 117-118 頁。後に IV で概観する寓意的聖書解釈をも含めて、本文で述べたような解釈の苦心惨憺は、いうまでもなく、旧約を含む聖書が絶対の聖典だったからである。近代初頭に至っても、旧約の権威を云々することは、生命の危険に直結した。1582 年にフランス北東部の町メスで、学校教師ノエル・ジュルネは、旧約に矛盾と間違いを見出してそれをキリスト教の批判に利用したため、異端の廉で火刑に処せられた。アンソニー・グラフトン (ヒロ・ヒライ監訳・解題, 福西亮輔訳)『テキストの擁護者たち』(勁草書房, 2015 年) 381 頁。
- 39) Wynn, *supra* note 6, 219-224.
- 40) 海老名弾正「聖書の戦争主義」新人 5 卷 4 号 (1904 年) 6 頁。しかも旧約聖書は、自衛的戦争のみならず侵略的戦争をも是認している (7 頁)。『新人』は、本郷教会 (現、弓町本郷教会) を拠点とする海老名の首都伝道活動の機関誌ともいべき媒体であった。同誌上で、また同誌の周辺で、海老名ばかりでなく、石川三四郎、木下尚江、吉野作造ら近代日本思想史の巨星が健筆を揮ったことで知られる。同誌については、海老名研究の第一人者の手になる論稿、吉馴明子「海老名弾正と『新人』の青年たち」跡見学園短期大学紀要 15 号 (1979 年) 53 頁以下が有益である。なお、現代の著名な注釈家の一人は、本文で引用した申命記の記述が敵勢力の徹底的な壊滅を戦争目的に据えている点で、クラウゼヴィッツの戦争論に似ている、と指摘している。Peter C. Craigie, *The Book of Deuteronomy* (William B. Eerdmans Publishing Co., 1976), 57.
- 41) Tertullian (S. Thelwall, trans.), *On Idolatry* (orig. *De idolatria*), ch.19, Alexander Roberts, James Donaldson & A. Cleveland Coxe (eds.), *Ante-Nicene Fathers*, vol. 3 (Christian Literature Publishing Co., 1885) 《<http://www.newadvent.org/fathers/0302.htm>》.

- 42) R・H・ベイントン（中村妙子訳）『戦争・平和・キリスト者』（新教出版社、1963年）144頁。
 ところで、深瀬忠一「戦争放棄と軍備撤廃の法思想史的研究(1)」芦部信喜編『宮沢俊義先生古稀記念 憲法の現代的課題』（有斐閣、1972年）12頁は、預言者イザヤ（およびエレミヤ）が「戦争否定の主張と思想に達した」と述べている。なるほどイザヤ書の有名な聖句、「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」（2章4節）は、まことに美しく、それだけをとってみれば平和思想の古代的表現であるように見える。しかし、この平和はあくまでも、「終わりの日」（2節。この言葉の意味については、鍋谷堯爾『イザヤ書注解 上』（いのちのことば社、2014年）158-159頁）になってはじめて訪れるものであり、そこに至るまでには、例えば、バビロンで、「見つけ出された者は皆、刺し殺され／捕らえられた者は皆、剣に倒れる。／幼子たちは彼らの目の前で打ち砕かれ／どの家も強奪され、女たちは辱められる。」（13章15-16節）、エドムで、「刺し貫かれた人々は投げ捨てられ／死骸は悪臭を放ち／山々はその血によって溶ける。」（34章3節）という凄惨な場面が繰り返されるのである。平和は、まさしく「大なる殺戮の日」（30章25節）の繰り返しの末にはじめて訪れる。イザヤが平和思想に達したというのであれば、例えば、日米最終戦争後に恒久の平和が訪れると（かなり本気で）説いた石原莞爾もまた、平和思想家に列せられるであろう。現代アメリカの福音主義者（evangelical）たちが、「終わりの日」の到来を待ち望んで核戦争を希求しているように、ハルマゲドンを経てこそはじめて真の平和が訪れるというのは、むしろ、軍国主義の標準的言説ではなからうか。ギリシア・ローマや原始キリスト教に始まる滔々たる平和思想が戦後日本に流入して憲法9条に結実した、という構図を、深瀬は倦みず弛まず説き続けた（例えば、深瀬『戦争放棄と平和的生存権』（岩波書店、1987年）12頁、149頁）のであるが、こうした、いわば「流入論」は、東洋・西洋の諸思想を吸収・「醇化」して無比の国体を形成すべしと説いた文部省『国体の本義』（1937年）とよく似ていると思われる。なお、近現代の注釈家が、「大なる殺戮の日」などという物騒な語句に深入りしたがないのは、心情的にはよく理解できる。矢内原忠雄も、「〔大なる殺戮の日、やぐらのたふる、時〕は神の審きの行われる時です」と、さらりと触れるに止めている。同『矢内原忠雄未発表聖書講義 イザヤ書・ミカ書』（新地書房、1984年）177頁。
- 43) 橋口倫介『十字軍—その非神話化』（岩波新書、1974年）4頁。
- 44) ニューイングランドの入植者たちについては、山内進『増補 十字軍の思想』（ちくま学芸文庫、2017年）8章。先住民は、アマレク人—その聖絶を命ぜられながらイスラエル人が躊躇したため、神の不興を買った（サムエル記上15章1-13節）—になぞらえられた。社会主義から極右まで、西欧志向から民族主義まで、実にさまざまな思潮を含むシオニズムにとって旧約聖書がいかなる靈感を与えてきたか、といった大問題を扱う能力は私にはないが、運動全体を見れば、世俗主義が意外なほど優勢であるように見える。William Holladay, *Is Old testament Zionist?* (1968) (http://www.duxburysystems.org/downloads/holladay/bill/old_testament_zionist.pdf), 17. もちろん、宗教色濃い右派には、ヨシユア記などを引いて、イスラエルによる近隣諸国の領土併合を求めるものもある。森まり子『シオニズムとアラブ』（講談社選書メチエ、2008年）192頁。
- 45) グレース・ハルセル（越智道雄訳）『核戦争を待望する人びと』（朝日選書、1989年）8-9頁。
- 46) 直接戦争を肯定する典拠として引用されている例ではないが、近代国際法の草分けの一人ジェンティリは、ヤハウエが、イスラエル人のために「聖絶」することを約束したカナンの地の諸々の民とは協定を結んではならない、と命じた（出エジプト記23章23節、32節、申命記7章1-2節。「聖絶」の約束は、ほかに、民数記33章52節、申命記20章17節）ことを主たる根拠として、通商上の協定などを例外として、異教の民と協定と結ぶことは許されない、と主張した。Alberico Gentili (John C. Rolfe, trans.), *The Three Books on the Law of War* (orig. *De Iure Belli Libri Tres*, rep. Oceana Publishing, 1964), ch.19. かくして、異教の野蛮人に対する不信から、例えばフランス・トルコ間の条約を無効だとするジェンティリの主張は、自己保存のための戦争はもとより、人類社会の利益のためのそれも正当であり、したがって、獣姦や食人という汚らしい習慣を持つラ

- テンアメリカの原住民に対してスペインが仕掛けた戦争も正当である、とする立場と整合している。リチャード・タック（萩原能久監訳）『戦争と平和の権利』（風行社、2015年）60-64頁。
- 47) マタイ福音書5章9節。
- 48) エルンスト・トレルチ（住谷一彦＝山田正範訳）『キリスト教社会哲学の諸時代・諸類型』『トレルチ著作集7』（ヨルダン社、1981年）187-192頁。
- 49) ルイ・デュモン（渡辺公三＝浅野房一訳）『個人主義論考』（言叢社、1993年）42-43頁は、初期教会の信徒の中に、インドの宗教者と同様の「現世放棄者」「世俗外個人」を見出している。もちろん、西欧的個人主義の起源を探究する文脈において、である。
- 50) Doynce Dawson, *The Origins of Western Warfare: Militarism and Morality in the Ancient World* (Westview Press, 1996), 3.
- 51) それゆえ異教徒たちは、キリスト教内の分派闘争の激しさを嘲笑っていたようである。例えば、オリゲネス（出村みや子訳）『ケルソス駁論』『キリスト教教父著作集9　オリゲネス4』（教文館、1997年）10-11頁（原典3巻10章）。分派の数を、2世紀後半の教父リヨンのエイレナイオスは2ダースほどと、3世紀はじめの対立教皇ローマのヒッポリュトスは50超と報告しているという。John F. Shean, *Soldiering for God* (Brill, 2010), 105-106.
- 52) Shean, *supra* note 51, ch.3.
- 53) 使徒行伝10章48節。新約聖書の記述に、学術論文のような一貫性・統一性を見出すことはできない。平和志向と軍役肯定的な姿勢とが混在しているように、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ福音書5章44節）と教える博愛主義・宥和主義の側面もあれば、「だから、神に服従し、悪魔に反抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げて行きます。」（ヤコブ書4章7節）という反抗的・戦闘的な側面も見せている。こうした一見矛盾する側面をもっていたからこそ、一方で外部の社会との通路が開かれるとともに、迫害と偏見に耐える素地が築かれたのである。H. A. Drake, *Lambs into Lions: Explaining Early Christian Intolerance*, *Past and Present*, no.153 (1996), 18-19.
- 54) オリゲネス（出村みや子訳）『ケルソス駁論』『キリスト教教父著作集8　オリゲネス3』120頁（原典2巻30章）。
- 55) テルトゥリアヌス（鈴木一郎訳）『護教論』『キリスト教教父著作集14　テルトゥリアヌス2』（教文館、1987年）79-81頁（原典30章、32章）。
- 56) J・ヘルジランド＝R・J・デイリー＝J・P・バーンズ（小阪康治訳）『古代のキリスト教徒と軍隊』（教文館、1988年）3章、木寺廉太『古代キリスト教と平和主義』（立教大学出版会、2004年）93-96頁。
- 57) Ronald J. Sider, *The Early Church on War and Killing* (<http://www.booksandculture.com/articles/2016/janfeb/early-church-on-war-and-killing.html>).
- 58) B・ボット（土屋吉正訳）『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』（再版、オリエンズ宗教研究所、1987年）37頁（原典16章）。
- 59) Ronald J. Sider, *The Early Church on Killing* (Baker Academic, 2012), 190-191.
- 60) マタイ福音書5章39節。以下、共観福音書中の並行句は省略する。
- 61) マタイ福音書5章41節。
- 62) マタイ福音書5章43-44節。
- 63) マタイ福音書7章1節。
- 64) マタイ福音書26章52節。
- 65) ロマ書12章19節。
- 66) *Decretum Gratiani*, causa 23, q. 1, dicta Gratiani, Gregory M. Reichberg, Henrik Syse & Endre Begby (eds.), *The Ethics of War* (Blackwell, 2006), 109-111. グラティアヌスの経歴については、ほとんど何も知られていない。Anders Winroth, *The Making of Gratian's Decretum* (Cambridge UP, 2000) 5-8.

- 67) ロドニー・スターク (穂田信子訳) 『キリスト教とローマ帝国』 (新教出版社, 2014年) 19頁。
 なおスタークは、得意の「社会科学的方法」を古代キリスト教史に適用して、殉教者の振舞いを、マゾヒズムの発現といった病理現象としてではなく、現世と来世での栄光を確信する者の効用最大化行動として説明している (8章)。
- 68) Shean, *supra* note 51, 112.
- 69) マルコ福音書 13章 30節。
- 70) ペトロ後書 3章 3-4節。
- 71) 例えば、テルトゥリアヌス (鈴木訳)・前出注 55, 80-81頁 (原典 32章) は、「われわれはそうした〔世の終わりの〕体験はしたくない」と正直に語っている。
- 72) 同会の名称が、本文で紹介した百人隊長コルネリウスに由来することはいうまでもない。同会については、<http://jmcf.s302.xrea.com/intro.html>。
- 73) Wynn, *supra* note 6, 49-53.
- 74) 出エジプト記 14章 26-28節。
- 75) エウセビオス (秦剛平訳) 『エウセビオス「教会史」(下)』 (講談社学術文庫, 2010年) 233-234頁 (原典 9巻 9章)。
- 76) 同条は、戦時における軍役放棄について明示的には規定していないため、古来さまざまな解釈を生んできたが、ウインは、読んで字の如く、兵士たる以上、戦時においてはもとより、平時にあっても軍役を忌避することは許されない、という意味だとしている。Wynn, *supra* note 6, 56-57. ただし、信仰を理由として軍役からの免脱を望む兵士がいたとすれば (いたからこそ、こうした決議がなされたのであろう)、そこに、キリスト教の平和主義の「残り香」を嗅ぐ思いがする。
- 77) Raymond Van Dam, *The Roman Revolution of Constantine* (Cambridge UP, 2007), 11.
- 78) Paul Stephenson, *Constantine: Unconquered Emperor, Christian Victor* (Quercus, 2009), 278.
- 79) ベイントン・前出注 42, 107頁。なお、平和主義からの離脱は、「原始キリスト教的共産主義」 (仮にそういうものが存在した、としての話であるが) からの離脱と並走した現象であったかも知れない。この点については、今日の研究水準からすれば歴史学の文献と呼ぶには疑義も呈されようが、カウツキーの精彩に富む叙述がなお逸し難い価値をもつであろう。カール・カウツキー (栗原佑訳) 『中世の共産主義』 (法政大学出版局, 1980年, 原著 1909年) 31-45頁。
- 80) ロマ書 13章, 特に 1-2節。
- 81) アウグスティヌス (金子晴勇ほか訳) 『神の国 上』 (教文館, 2014年) 63頁 (原著 1巻 21章)。
- 82) Epist. 153, 16, E. M. Atkins & R. J. Dorado (eds.), *Augustine: Political Writings* (Cambridge UP, 2001), 80. この書簡は、小野紀明『西洋政治思想史講義』 (岩波書店, 2015) 100頁でも紹介されている。また、グラティアヌスは、この章句をそっくりそのまま引用している。 *Decretum Gratiani*, causa 23, q. 5, c. 18, Reichberg et al. (eds.), *supra* note 66, 118.
- 83) 予型論と寓意的解釈との異同について、秋山学『教父と古典解釈—予型論の射程』 (創文社, 2001年) 17頁は、次のように述べている。
 「予型論とアレゴリー (寓意 [的解釈]) とが区別しがたい場合もあるが、予型とは前表とも訳されるように、過去の出来事・人物が未来・現在の出来事・人物をあらかじめ表現する場合を指し、そこには時間的先後関係が前提とされる。また予型および成就に関して、ある一定の「型」が備わっていることも求められるのが普通である。これに対して寓意的解釈とは、字義と異なる次元の意味がテキストに秘められていると仮定し、その真意を解明する方法を指す。ホメロスの詩作品に対する寓意的解釈や、ユダヤ人フィロンによる寓意的律法解釈も存在し、そこにはキリストの中心性が前提とはされていない。」
- 84) Origen, *Against Celsus*, Reichberg et al. (eds.), *supra* note 66, 64 (orig. *Contra Celsum*, VIII, 73).
- 85) オリゲネス (小高訳)・前出注 20, 288-289頁 (原典 4巻 2章 4節)。
- 86) これは、箴言 22章 20-21節の引用であるが、『新共同訳』では、「わたしの意見と知識に従って

三十句／あなたのために書きつけようではないか。／真理とまことの言葉をあなたに知らせるために／まことの言葉をあなたの使者に持ち帰らせよう。」となっており、随分と開きがある。オリゲネスが用いたのは七十人訳であろうが、その英訳（いくつかのバージョンを Web 上で閲覧できるが、私が見たのは、《<http://www.ecmarsh.com/lxx/>》である）を見る限り、「三回」云々の語句は見当たらない。

- 87) オリゲネス（小高訳）・前出注 20, 300 頁（原典 4 卷 3 章 4 節）。この父・子・孫の死と埋葬とについては、それぞれ、創世記 25 章 7-10 節, 35 章 27-29 節, 49 章 29-33 節に記載されている。ただし、『新共同訳』には、「二つに分かれた」云々の記載は見当たらない。また、オリゲネスは、これらの記載を歴史的事実だと見ているのであるから、彼らの享年がそれぞれ 175 (25 章 7 節), 180 (35 章 28 節), 147 (47 章 28 節) であったことも事実だと思っていたのであろう。
- 88) コリント前書 9 章 9 節。
- 89) オリゲネス（小高訳）・前出注 20, 296 頁（原典 4 卷 3 章 1 節）。創世記 1 章 1-13 節によれば、神は、第 1 日に光を、第 2 日に天を、第 3 日に草木を、作った。第 1 日に「神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた」(4-5 節) とあるから、初日から「朝」と「晩」とがあったとしてもおかしくないのではなからうか。この点は、あの世で是非オリゲネス本人に問い質したいところである。
- 90) オリゲネス（小高訳）・前出注 20, 298 頁（原典 4 卷 3 章 3 節）。右ではなく左の頬をまずは打つはずだという指摘は、アウグスティヌスもしている。Epist. 138, 12, Atkins & Dodaro (eds.), *supra* note 82, 36. アウグスティヌスによれば、この章句は通常、誰かがあなたのより価値あるものを攻撃してきたなら、価値のより少ないものを攻撃者に差し出しなさい、という意味に解釈されている。さもないと、忍耐よりも復讐を目標とし、永遠なるものよりも有限なるものの方に配慮することになりかねないからである。しかし、イエスの時代には、右手の甲で相手の右頬を打つことは、目上の者が目下の者に対してする侮辱的な振る舞いであったという。Sider, *supra* note 59, 69. また、さまざまな傍証を引いて、アウグスティヌスはこの章句を、「肉的な善きものを犠牲にしても信仰を守れ」という意味に解釈していた、と主張する興味深い論稿に、林明弘「「右の頬を打たれたら」『マタイ』 5, 39 についてのアウグスティヌスの解釈」川崎医療福祉学会誌 12 卷 2 号 (2002 年) 241-245 頁がある。
- 91) ヨシヤ記 5 章 2 節。
- 92) コリント前書 10 章 4 節。
- 93) Origen (Barbara J. Bruce, trans.), *Homilies on Joshua* (The Catholic University of America Press, 2002), 63-64 (orig. Homily 5, 5). もっとも聖書自身が、イスラエルの民が出エジプトの後に曠野を 40 年にわたって彷徨している間に、割礼を受けた成人男子は死に絶え、途中で生まれた者は無割礼だったので、再度の割礼が命ぜられた、と説明している (ヨシヤ記 5 章 4-8 節) のであるから、オリゲネスの解釈は聊か奇妙である。Op. cit., 63, n. 25. なお、アウグスティヌスは、このときイスラエルの男子の中には、割礼を受けた者も受けていなかった者もいた、と解しているようである。Augustine (Joseph T. Lienhard & Sean Doyle, trans.), *Questions on the Heptateuch*, Boniface Ramsey (ed.), *The Works of Saint Augustine*, pt 1, vol.14 (New City Press, 2016) 357-358 (orig. *Quaestiones in Heptateuchum*, VI, 6).
- 94) オリゲネス（小高訳）・前出注 20, 294 頁（原典 4 卷 2 章 8 節）。
- 95) オリゲネス（小高訳）・前出注 20, 286 頁（原典 4 卷 2 章 1 節）。
- 96) オリゲネス「ケルスス駁論」7 卷 18 章。ネメシエギ「オリゲネスの聖書解釈法」日本の神学 5 号 (1966 年) 118 頁から重引。
- 97) Origen (Frederick Crombie, trans.), *Against Celsus*, VII, 19, Alexander Roberts, James Donaldson & A. Cleveland Coxe (eds.), *Ante-Nicean Fathers*, vol.4 (Christian Literature Publishing Co., 1885) 《<http://www.newadvent.org/fathers/04167.htm>》。
- 98) Origen (Crombie, trans.), *supra* note 97, VII, 22.

- 99) Origen (Bruce, trans.), *supra* note 93, 138 (orig. Homily 15, 1).
- 100) ヨハネ福音書 14 章 27 節。『新共同訳』では、「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」となっているが、以下、後注 102 まで、オリゲネス自身の表現に従う。
- 101) ロマ書 12 章 19 節。
- 102) コリント前書 6 章 7 節。
- 103) エフェソ書 6 章 11 節。
- 104) エウゼビオス (秦訳)・前出注 75, 31 頁 (原典 6 卷 8 章)。
- 105) オリゲネス (小高隆訳)『雅歌注解・講話』(創文社, 1982 年) 80-81 頁 (原典「雅歌注解」1 卷)。
- 106) Origen (Gary Wayne Barkley, trans.), *Homilies on Leviticus 1-16* (The Catholic University of America Press, 1990), 29-30 (orig. Homily 1, 1).
- 107) 野町啓『学術都市アレクサンドリア』(講談社学術文庫, 2009 年) 146 頁。
- 108) よく知られているように、フィロン、(アレクサンドリアの)クレメンス (150 頃 - 211/16), オリゲネスの三人は、プラトン主義の系譜を引きつつ寓意的解釈を施した代表的学者として、前者がユダヤ教徒、後二者がキリスト教徒であるにもかかわらず、「アレクサンドリア学派」として一括りにされることが多い。この三人の関係についての手際の良い概観として、出村みや子『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学』(知泉書館, 2011 年) 1 章がある。フィロンについてはもちろん多くの研究があるが、神秘主義者としての側面を強調するものとして、グッドイナフ (野町啓 = 兼利琢也 = 田子多津子訳)『アレクサンドリアのフィロン入門』(教文館, 1994 年)、特にその 7 章、「寓意的注解シリーズ」の内容を概観するものとして、ケネス・シェンク (土岐健治 = 木村和良訳)『アレクサンドリアのフィロン: 著作・思想・生涯』(教文館, 2008 年) 203-214 頁、がある。
- 109) H・チャドウィク (中村坦 = 井谷嘉男訳)『初期キリスト教とギリシア思想』(日本基督教団出版局, 1983 年) 141 頁。
- 110) Wynn, *supra* note 6, 96-120.
- 111) Augustine (J. G. Cunningham, trans.), Epist. 46, 12, Philip Schaff (ed.), *From Nicene and Post-Nicene Fathers, First Series, vol.1* (Christian Literature Publishing Co., 1887) 《<http://www.newadvent.org/fathers/1102046.htm>》。
- 112) 「書簡 47」(金子晴勇訳)『アウグスティヌス著作集 別巻 I』(教文館, 2013 年) 126 頁 (原典 5 章)。
- 113) タック (萩原監訳) 前出注 46, 103 頁。
- 114) この考え方は、386 年の有名な「回心」の約 1 年後に書かれ始めたと言われる「自由意志」以来、一貫している。アウグスティヌス (泉治典 = 原正幸訳)「自由意志」『アウグスティヌス著作集 3』(教文館, 1989 年) 31-34 頁 (原典 1 卷 5 章)。
- 115) この過程は、坂口ふみ『〈個〉の誕生: キリスト教教理をつくった人びと』(岩波書店, 1996 年) が、典雅な筆致で分析している。因みに、平和主義と重なるところが多いであろうが、古代哲学においてしばしば性格の歪みの発露のように見なされた慈愛の精神が、積極的に称揚されるようになったのも、キリスト教の遺産のひとつに数えられよう。E. A. Judge, *The Quest for Mercy in Late Antiquity, Jerusalem and Athens* (Mohr Siebeck, 2010), 185-186.
- 116) チャドウィク (中村 = 井谷訳)・前出注 109, 148 頁。

* Website の閲覧は、すべて 2017 年 11 月 7 日。